

新島襄の

遺墨の献納

竹中正夫

今回校友今泉隼雄氏（昭和五年同神卒）

によって新島 襄の遺墨が同志社に寄贈された。「寧ろ玉碎^{たまつぶ}為^なん、瓦全^{いんぜん}を恥^{かたじけなく}ず」と墨痕鮮やかに記されている軸物である。四七才の若さで玉碎^{たまつぶ}していった新島の生涯を象徴しているかにみえる作品である。気魄にみちた力作といえよう。

この書を新島から贈られたのは隼雄氏の父今泉真幸氏である。真幸氏の父は、会津藩士であったが戦いに敗れ、一時新潟県北蒲原郡京ヶ瀬に連れていたときに生れたのが真幸氏であった。明治四年のことである。一五才のとき、同志社普通学校で学ぶことを決意し、若松から東京まで人力車を出て、東京から船で大阪に行き、淀川を伏見まで舟で上って京都に来たという。明治二四年普通学校を卒業した。八重夫人が会津出身

であったことから、会津藩主松平家の御曹子をはじめ同志社で学ぶものが少くなく新島夫妻と山本覚馬を中心にとった会津グループの写真も今泉家に残っている。

本書は、今泉真幸氏が同志社普通学校に在学中に新島先生に書いてもらったもので、明治二〇年のころのものと思われる。

この年のはじめ、新島は父民治を失い、夏には北米の父ともいうべきハーディー永眠のしらせをうけ、心の痛手は蔽うべくもなかった。その上、従来から思わしくなかった彼の肢体は過労のためにおかされていった。しかし、彼の内なるおもいはますますさかんなるものがあり、六月には仙台の東華学校の開校式、一月には、同志社病院の開院式ならびに京都看病婦学校の開校式を挙げると共に、同志社図書館の開館式を行うなど顕著な働きがなされている。彼の心中には大学設立のためには粉骨碎身、玉碎をも辞さないという悲願のようなものがあった。本書にはその気概がにじみ出ている。新島の書の多くは複製であり、これだけ力ある直筆はきわめて貴重な作品である。

今泉真幸氏は、明治二四年普通学校を卒

業したのち、新潟の北越学館で働き、明治二六年同志社に戻って神学を学び、明治二九年に神学校を卒業し、その後再び新潟で教育と伝道に励み、明治三七年から四二年まで同志社で神学を教えている。担当は組織神学、キリスト教倫理学であった。シドニー・ギューリックと共にウィリアム・ブラウンの『基督教要義』を訳して出版（明治四五年）している。

明治四二年から昭和一七年まで神戸多聞教会の牧師をつとめたかたわら、日本組合基督教会の理事長、総会議長、教師会長などを歴任し、戦後は日本聖書協会理事長として聖書出版事業に尽力するなど、基督教会の長老として貢献するところが多かった。昭和四一年、京都の鷹峯の隼雄氏宅で九五才の生涯を閉じた。隼雄氏は、平安女学院短大教授しておられたが引退後は、京都教会の会員として教会生活を楽しみとして励んでおられる。

今泉家に伝わる家宝を同志社は社宝として大切に保存すると共に、この書にこもる新島の精神を現代に生かすようにつとめたと思う。

（大学神学部教授）